

事務 / 通信 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室内 柴田和豊宛

Tel. / 042(329)7608 Fax. / 042(329)7599 (柴田直通)

Tel. / Fax. 042(329)7594 (相田直通)

E-Mail. / kshibata@u-gakugei.ac.jp (柴田) / aidaman@u-gakugei.ac.jp (相田)

学会の新体制がスタートしました

代表理事 柴田和豊 (東京学芸大学)

8月27日に夏期の役員会が開かれ、新体制の根幹をなす理事の役割分担が決まりました。当日は、23名の役員のうち、10月末まで公用でアメリカ出張中の藤江副代表を除く21名の理事と、2名の監事計22名が出席し、仲々の盛会でした。分担決定にあたっての第一の原則は、各役員が必ず何らかの職務に関わるということで、「研究企画」や「学会の在り方の検討」「国際交流」などの課題別に割り振りが行われました。本日は、そのことについて具体的に報告しますが、まずは活動の方針から記させていただきます。

代表の交代によって学会運営に変化が生じるのは、それぞれに個性がある以上、当然のことかもしれません。しかし、まず明らかにしておきたいことは、花篤代表時代のよき成果はそのまま踏襲したいということです。なぜなら、その時々代表の特性を生かすことと並んで、誰が代表や事務担当者になったとしても同様の成果が上がる合理的なシステムを確立していくことがきわめて重要な課題であるからです。一定の時間をかけて定着してきて

いるものには重みがあり、学会のよき形式を煮つめていくために、継続するということが大切にしていきたく思っています。それゆえ、リサーチ・フォーラムはその象徴的な例として、今後も学会の中心活動として継続したく思っています。

但し、次の二つの点から学会活動全般に検討を加え、活動をさらに充実していきたく思っています。第一点としては、会員の方々が学会活動に触れる機会を増やしたいと思っています。そのために後述のような新たな活動をスタートさせる予定です。第二の点としては、美術教育をめぐる厳しい(社会的)状況を念頭において、学会の基本的な進路を検討する委員会を設置し、新たな活動を浮上させていこうと思っています。

前者については、学会誌と学会通信それに部会活動を除くと、学会員と学会を結ぶパイプは春の大会と夏のリサーチ・フォーラムということになりますが、それでは会員が参集する機会が少ないように思えます。そのために、リサーチ・フォーラムの他に、日本列島を東西に分けて東地区と西地区の研究発表会を新たにスタートさせ、季節ごとに一度はお互いが顔をあわせるようにしたいと思っています。リサーチ・フォーラムが、学会主導の企画として、テーマを設定してシンポジウムなどを組んでいくのに対し、地区発表会では個々の会員の研究が主役となっていきます。春の大会発表の小規模なものを想像して頂ければよいかと思います。

後者に関しては、学校での授業時間数の削減

を震源に、「美術教育は学校教育を主たるフィールドとし続けるのか」「それとも社会教育的な展開を図るのか」、あるいは「美術教育の対象領域は美術に限定するのか」「それとも現代の視覚的文化全般を視野におくのか」を議論していく必要が生じていますが、当学会としてもそのことの議論を精力的に行っていくと思っています。そのために理事の役割分担に学会の在り方についての検討委員会を設け、委員会での議論をもとに、来年の今頃には当学会の進路を会員全体で考えていくための企画を立ち上げることができればと思っています。

それでは次に理事の役割分担を課題別に記しておきます。

学会誌編集委員会

赤木里香子(岡山大)、上山浩(三重大)、仲瀬律久(聖徳大)、長田謙一(千葉大)、永守基樹(和歌山大)、西野範夫(上越教育大)、浜本昌宏(武蔵野女子大)

(印は長、以下も同様。但し長が決まっていないところもあります。)

研究企画

赤木里香子(岡山大)、上山浩(三重大)、宇田秀士(奈良教育大)、岡崎昭夫(筑波大)、辻泰秀(岐阜大)、橋本泰幸(鳴門教育大)

研究企画の職務は、シンポジウムの開催、学会誌以外の研究刊行物の発刊など、研究の活性化を促す企画を多様に立案し、実行することです。

学会在り方検討委員会

新井哲夫(群馬大)、金子一夫(茨城大)、長田謙一、永守基樹、福本謹一(兵庫教育大)

研究部会

新井哲夫、岩崎由紀夫(大阪教育大)

研究部会担当の職務は、部会活動の円滑化を図るとともに、部会の在り方についての検討を重ねることです。

地区研究発表会運営

東地区 - 大橋皓也、金子一夫、宮脇理
西地区 - 岩崎由紀夫、花篤實(大阪芸大)、福本謹一

国際交流

岡崎昭夫、仲瀬律久

学会通信

宇田秀士、辻泰秀

学会ホームページ

国内 - 上山浩、海外 - 岡崎昭夫

学術会議関連・他学会との関係促進

教育学系 - 宮坂元裕(横浜国大)、長谷川哲哉(和歌山大、前期からの継続)

芸術学系 - 長田謙一、藤江充(愛知教育大)

以上に理事の役割分担について全容を記しましたが、さらにそれらの役割全体に関わることとしては、宮坂元裕氏と藤江充氏の両副代表理事が個々の役割ならびに役割相互間の調整役を務めます。輻輳する様々な問題群の関連性を把握して、向こう3年間にわたって生産的な議論の道筋を示していくという大役を担ってくれます。

そして、それに加えて事務担当者として東京学芸大学美術学科・助手の相田隆司氏と、場合によっては1~2名のアルバイトのサポーターが執行部を支えてくれます。前の学会通信でもお伝えしましたように、これまでのような形で事務局を組織するのが困難になっている関係で、このような形になる次第です。いまいちどご承知おき下さい。

ともかくも、新体制がスタートします。いろいろと不備な点があるはずですが、お気づきの点は遠慮なくお知らせ下さい。また様々のご提案をお寄せ下さい。学会通信41号では、「議論不在」という学会の空気が批判されていました。指摘の通りであるなら、私たちの学会の未来は明るくはないでしょう。会員の様々な声があったこそ、学会は活性化できるのです。ですから、会員の方々からの発信を心待ちにしております。連絡先は東京学芸大学美術科教育学研究室内・柴田和豊あるいは相田隆司宛にお願いいたします。電話・ファックス番号、メールのアドレスにつきましては、通信の最初の頁に記載されているとおりです。

学会通信編集担当の交代を機に

浜本昌宏（武蔵野女子短大）

学会通信は会員と会をつなぎ、共に状況を切り拓いていく広場的な役割を持つだけに、私は担当の一人として内容的に片寄りがないよう、待に書評・文献紹介には幅広い英知を反映するよう努力したつもりです。とはいえ、力量不足で期待に充分応えきれなかった点もあるかと、この機に振り返っているところです。

さて、この機にもう一つ、私は学会に相応しい研究・実践は、その深い学び合いの中に、現実を発展的に打開し、洋々たる未来を生みだすリアリティを持つ事がなによりも重要と考えます。そうした基本的課題の一つに地に足のついた活動があり、また国際的には特に近隣諸国(東アジア)との連帯的発展があらうかと思えます。

この8月、私は中国の古都で有名な洛陽・開封などのある河南省の人民政府と芸術教育促進会の招きで訪中し、＜美術教育の役割と今日的課題＞について述べてきました。時あたかもオリンピック開催決定の余韻に沸いていましたので、スポーツ界に劣ることなく芸術文化とその教育にも力を注ぐ必要性を添える事となりました。

東アジアは数千年の歴史と誇るべき芸術文化の膨大な遺産を共有する文化圏であることを重視し、それをベースにいつその友好・発展に繋げたいものと考えています。数多くの訪中で得た教訓など、若い会員の皆さんに伝え、バトンタッチしながら、引き続き美術教育の大道を共に歩みたいものと願っています。感謝

新井哲夫（群馬大学）

浜本、宇田両理事とともに、1998年12月の第31号から2001年6月の第41号までの計11号分の学会通信編集に携わりました。3者間の連携もスムーズに進み、記事の原稿依頼についても多くの会員諸氏のご協力を得ることができました。会員に親しまれる通信づくりという当初の目標に、ある程度まで近付けたのではないかと考えています。原稿執筆等でご協力をいただいた多くの方々に、この場をお借りし感謝申し上げます。

3年間編集に携わって改めて強く感じたことは、会員相互のコミュニケーションの大切さです。会員一人一人が当事者意識をもって学会活動にかかわるためにも、学会通信の果たす役割は大きいと思います。再任の宇田理事および新任の辻理事で構成される新スタッフの今後のご健闘を心からお祈りします。

* * * *

新入会員の紹介

下記の方々が、8月27日に開かれました夏期役員会において、新入会員として承認されました。

辻政 博（板橋区立上板橋第二小学校 教諭）

藤木 周（名古屋芸術大学美術学部 講師）

横田佳子（東京学芸大学 大学院）

李美善（同上）

下口美帆（神戸大学総合人間科学研究科 研究生）

会費納入のお願い

学会の財政的な基盤は、会員からの年会費によって成り立っています。ここ数年来、当学会が財政的に厳しい状況にあるのは周知の通りですが、会費滞納がなくなれば、一挙に健全財政を実現できるほどです。つきましては、まだ納入されていない方は、学会事務センターより7月に送付されています振り込み用紙にて、取り急ぎご入金下さいませようお願い申し上げます。



第24回美術科教育学会 鳴門大会・第一次案内

大会メッセージ

美術と美術教育の再考
複製が「美術は何か」を問いかける



鳴門大会事務局代表
橋本 泰幸

第24回美術科教育学会鳴門大会は、「大塚国際美術館」で開催いたします。

当美術館は、大塚製薬グループが平成10年に設立した陶板による西洋名画の複製美術館で

す。作品は、「環境展示(作品を含んだ環境の展示)」、「系統展示(美術史的理解のための展示)」、「テーマ展示(生と死等の普遍的主題による展示)」と、工夫して展示されています。中でも圧巻なのは、古代遺跡や教会などの壁画を空間ごと再現し、臨場感を味わえるようにした「環境展示」による作品群です。

鑑賞者は、こうした作品群に囲まれることにより、その時代の造形空間を体感し、リアリティーのある体験を持つことができます。ここでは、「複製」が、それを描いた画家の息遣いや、描かれた当時の民衆のざわめきまでも感じさせてくれるのです。これは、まさに「複製」による、まったくオリジナルな空間の経験であるといえるでしょう。

ところで、造形芸術の世界において「模倣」や「複製」は、いつの時代でも「原作」と対峙され、ともすると芸術的価値の低いものとしてとらえられてきたのではないのでしょうか。しかし優れた「複製」は、芸術の「保存」・「普及」の意味では大きな役割を果たすといえます。そして、美術教育の場においては、その特性が最もいかされているといえるでしょう。

また、「複製」は「原作」があって存在するといえますが、そこに独立した価値は見出せないのでしょうか。はたまた「複製」には、「原作」にない意味があり、新たな存在価値を発信しているとは考えられないのでしょうか。大塚国際美術館で経験する美的な驚きは、私たちにさまざまな問いを投げかけます。つまり「複製」は、美術と美術教育の意味を考える上で、とても刺激的かつ重要な意味をはらんでいるように思えるのです。

第24回美術科教育学会鳴門大会が、大塚国際美術館のご厚意により開催できる運びとなり、ぜひともこうした会場の芸術空間を生かした、特色ある大会になりますことを願っております。大会事務局でも、このさまざまな問いを投げかける美術館から大会をイメージし、講演会、シンポジウム等を企画したいと考えております。

つきましては、発表者の皆様におかれましても、「美術館」・「鑑賞」・「複製」等々の視点からの研究発表及び着実な基礎研究の報告を期待しております。また、美術教育を再考するような意欲的な研究発表がなされることも併せて期待しております。

美術科教育学会の大会が、公の場である美術館で開かれることには、学会と社会との連携という観点からも重要な意味があると思われまます。

ここに、会員の皆様の多数のご参会をお願いするとともに、ご案内申し上げます。

* * * *

大会の概要

会 期：平成14年3月26日(火)～28日(木)
会 場：大塚国際美術館（徳島県鳴門市）

大会第一日 3月26日(火)

10:00～ 受付開始
11:00～12:00 学芸員による美術館鑑賞ツアー
13:00～13:20 開会行事
13:20～14:20 講演会
14:20～14:50 発表会場の説明、移動、準備
14:50～16:35 研究発表 最大18件

大会第二日 3月27日(水)

9:30～10:30 自由鑑賞
(美術館は9時30分に開館となります。)
10:30～12:15 研究発表 最大18件
12:15～13:15 休 憩
13:15～15:00 研究発表 最大18件
15:10～16:40 シンポジウム
18:00～20:00 懇親会

大会第三日 3月28日(木)

9:30～10:30 自由鑑賞
10:30～11:35 研究発表 最大12件
11:50～12:30 研究部会報告
12:30～13:30 総 会

会場のご案内、特別行事の最新情報は、下記の大会ホームページで随時お知らせいたしております。参加申し込み方法、交通案内、宿泊先情報等につきましても、確定次第、ホームページでお知らせいたします。

大会ホームページ

<http://www.naruto-u.ac.jp/t.mikiya/>

美術科教育学会のホームページよりアクセスできます。

研究発表の申込みについて

別紙にて、研究発表の申込みについてご案内しております。発表希望の方は、詳細をご確認の上お申込みください。



大塚国際美術館2F現代系統展示『ゲルニカ』



大塚国際美術館位置(美術館ホームページより転載)

大塚国際美術館の詳細につきましては、下記ホームページをご利用下さい。

大塚国際美術館ホームページ

<http://www.o-museum.or.jp/>

問い合わせ

〒772-8502

徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748 番地
鳴門教育大学 芸術系(美術)教育講座
美術科教育学会鳴門大会事務局 谷口幹也
E-mail:t.mikiya@naruto-u.ac.jp

ご注意：大塚国際美術館への、大会に関するお問い合わせ
はご遠慮下さい。

* * * *

美術科教育学会公開シンポジウム および講演会の報告

第24回美術科教育学会鳴門大会に先立ち、平成13年5月26日、徳島県立近代美術館において、鳴門教育大学・橋本泰幸氏の講演会、及び美術科教育学会公開シンポジウムが開催されましたので、下記にてご報告いたします。

日時：平成13年5月26日(土) 14:00～17:00

会場：徳島県立近代美術館 1Fイベントホール

講演会

「アーサー・ダウとジャポニズムの美術教育」

鳴門教育大学教授 橋本泰幸

シンポジウム

新たな造形世界を拓く「鑑賞」による文化の交流

- アーサー・ダウとジャポニズムの美術教育に学ぶ -

提案者

元筑波大学教授

宮脇理

大阪芸術大学教授

花篤実

鳴門教育大学助教授

佐々有生

鳴門教育大学助手

谷口幹也

兵教大博士課程院生

結城孝雄

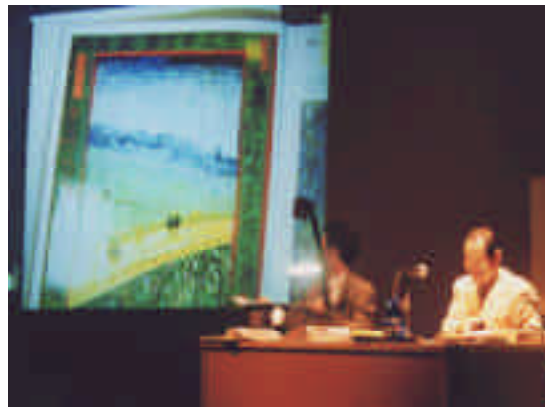
鳴門教育大学助教授

山本朝彦

(司会を兼務)

平成13年4月28日から6月3日までの期間、
徳島県立近代美術館において「ジャポニズム

展「世紀末から-西洋の中の日本」が開催された。この企画展に関連して、長年、ジャポニズムと日米の美術教育について研究されてきた橋本泰幸氏の講演会が開かれた。



講演会より(橋本泰幸氏)

講演会において橋本氏は、ジャポニズムと深い関係があるアーサー・ウエスレー・ダウ(1857-1922)が考え行なった美術教育について講演し、時代や文化が持つ視覚を学習することによって、自らの視覚を形成すること、見方、考え方が形成されることの重要性について講演を行なった。講演会のテーマを引き継ぐ形で開催された美術教育学会公開シンポジウムでは、「鑑賞教育」の意味などについて宮脇、花篤両先生をはじめとする各シンポジストが研究成果を披露した。

当日は、近県の本学会々員の先生方、及び徳島県下の教職員中心に多数の参加があり、盛会のうちシンポジウムを終えた。



公開シンポジウムより

リサーチ・フォーラム2001
 (第3回美術科教育学会課題研究会)
 を終えて



岩崎由起夫(大阪教育大学)
 福本謹一(兵庫教育大学)

第3回のリサーチ・フォーラムを無事終了することができた。本年度の研究課題は「総合学習と美術教育」であり、以下のような時程と内容で実施された。

日時：平成13(2001)年8月28日(火)10:00~17:00
 場所：東京都中央区ペンてる本社ビル14階会議室
 参加者数：29名

10:00 - 10:25

代表理事挨拶 柴田和豊(東京学芸大学)
 趣旨説明 司会 宇田秀士(奈良教育大学)

10:30 - 11:15

口頭発表1

「総合学習と美術教育 - 教育学的観点から」
 三浦浩喜(福島大学)



口頭発表1(三浦浩喜氏)

11:25 - 12:10

口頭発表2

「欧米における総合学習の動向と諸背景」
 福本謹一(兵庫教育大学)

12:20 - 13:20 昼食

13:20 - 15:00

口頭発表3

「総合的な学習をめぐる状況と展開」

岩崎由紀夫(大阪教育大学)

「図工科からの総合的学習の時間へのかかりについて」

辻 政博(東京都板橋区立上板橋第二小学校)



口頭発表3(辻 政博氏)

「中学校における「総合的な学習」への美術教育的アプローチについて」

松原雅俊(神奈川県横浜市立上郷中学校)



口頭発表3(松原雅俊氏)

15:10 - 16:30 全体討議

16:30 - 16:50 総括 宮坂元裕(横浜国立大学)
 諸連絡総括

テーマ設定の趣旨は、一昨年の美術教育におけるディシプリン(規範性)の問題及び昨年の美術批評と鑑賞教育の状況における諸課題を検討したことを引き継ぐ形で「総合的な学習」の



全体討議の様子

導入による美術教育と教科性とのかかわりを問うことであった。三浦氏は、日本生活連盟、日教組、勝田守一をはじめとする我が国の総合学習をめぐる諸思潮を綿密にたどるとともに、竹内常一の「視点としての総合学習論」をふまえた氏独自の3極構造論を提示した。

福本は、米国、英国を中心とした総合学習の歴史的経緯とその理論的背景として構成主義、社会文化理論、再構築主義、状況的認知理論、分散認知などがあることを紹介するとともに、具体的な総合学習に関わる美術教育の視点を提案した。

岩崎は、研究開発学校や特色ある教育活動と美術教育の課題を検討した。その中で教授・学習システムの見直し、教科再編を見据えたカリキュラム研究の必要性、ミニマム・エッセシャルの再検討などを課題提起した。

松原氏は、中学校における実践的レベルで、総合学習単元における統合過程としての美術、学校を開く媒体としての美術、総合学習単元を組織するコアとしての美術という3視点からの実践提案を行った。

辻氏は「開かれた図工室」という視点から図工科の教科性を保持した総合学習へのかかわり

を主張した。造形遊びなどの総合性の捉え方の問題などを軸に、中学年、高学年における実践資料をもとに教科性の再検討の重要性を指摘した。

宮坂氏の総括では、基礎基本と総合学習のかかわり、教科存立の問題などより大きな枠組みの視点が提示されたが時間の関係



総括（宮坂元裕氏）

で氏の意を反映した形にできなかったことは、我々の不手際によるものである。討議においては、参加者が少なかつたとはいえ、

活発な意見交換がなされたことが救いであった。

ディシプリンを巡るリサーチフォーラムは一段落したが、こうした課題研究が発展的に継続されることを望みたい。

最後に、発表を快く引き受けていただいた三浦氏、松原氏、辻氏に書面を借りて再度お礼を申し上げたい。

* * * *

《通信担当から》通信の発行業務は、この42号から東京学芸大学が担当することとなりました。紙面に関するご意見ご感想をぜひお寄せ下さい。さらに魅力的な通信に育てていきたいと思っています。(相田)